

道

(1)

山中に住む賢者に会うため山道を歩いていると、美しい花々と木々とその上でさえずる小鳥たちを見た。私はこの光景に感嘆し、この世界を作るためには素晴らしいエンジニアと天才的なデザイナーがいたに違いない、と考えた。このような色彩のハーモニーと小鳥たちの美しい声を作るには、最上級の審美眼が必要に違いないからだ。賢者に会ったら、私や皆が長年不思議に思っているこれらのことについて聞いてみよう、と私は思った。

賢者に会くと、私はこう尋ねた「昔、私は不思議に思ったり不安に思ったりしたことについて答えを探してみました。でも、分からないことだらけでした。そこであなたのような賢い人に会って私を導いてもらおうと考えたのです。どうか、私の様々な

質問を辛抱強く聞いてください。あなたのお知恵をお貸してください。」

賢者「あなたの望むように。ろうそくの火は他のろうそくにその火を移しても減ることはなく、湧き水は乾きに苦しむ者の喉を潤しても涸れることはない。」

私「最初の質問はこの世界の存在についてです。この世界が偶然によって成り立っているとは到底思えません。何か秘密があるはずで、大きな秘密が。」

賢者「もちろんですとも。この世界は偶然によってできているではありません。すべてのデザインにはデザイナーが、そしてすべての創造物にはそれらを作った創造主がいるのです。デザインはそれを作ったものの才能をあらわし、創造物が素晴らし

ければ素晴らしいほど、創造主の素晴らしさをあらわすのです。」

私「それでは、一体誰がこの素晴らしい世界を作り、これらすべてをデザインしたのですか。」

賢者「老子はこう言いました、

“天と地が存在する前から渾然としたものがあつた。言を発せず、孤立して、独りあって変わらず、よどみなく永遠に回転し続ける、至聖なる万物の母。私はその名を知らず”（老子「道德經第二十五章」）。

これこそが偉大な存在なのです。その偉大な力により、彼のことを表現することはかなわず、その絶えることのない広大な能力は無限であり、その深すぎる愛は図ることさえできないのです。老子はまたこのようにも言いました、“広大なことこの上なし、

それは他に比類がない、なぜなら無限だからである”。」

私「それと接触することはできるのですか。」

賢者「もちろんです。老子が言ったように彼は天下の母のようなものであり愛と慈しみにあふれ、その愛は世界に広がっているのです。彼は偉大であると同時に慈しみにあふれ、優しく、あなたは母を慕う子どものように彼と接することができるのです。」

私「彼に名前はあるのですか」

賢者「それは次回答えることにしましょう。もしその偉大な存在を真剣に知りたいたいと思うのなら、毎日 3 分間ひとりで静かな場所に座ってください。そしてあなたが存在する意味について考えてください。食

べることや飲むこと、仕事することではなくもっとあなたの内面に深くかかわることです。偉大な存在にその姿を見せるようお願いしましょう。子どもが母親にお願いするように彼の愛、彼の関心を求めなさい。母親が子どもを抱きしめるように、愛に満たされ彼の光の知識の恩恵を受けられるようお願いしましょう。もし人生に意味を見出したいのなら、そうしなさい。次の週会ったときにあなたがどこまで達成したのか、これからも生きる意味と存在の意義を知りたいと思うのか、見極めましょう。」

私「賢者よ、そのようにいたします。意義のない人生など意味はなく、愛のない生活など味気ないものです。」

無条件の愛の必要性

山の中で木々の間を一人で歩いているとき、私はまるで永遠と続く砂漠を彷徨っているかのような孤独を感じ、誰かが母親のように私を抱きしめてくれないかと思った。

こんな風に感じたのは初めてのことでない。いつからか分からないくらい昔から、友達や家族と一緒にいる時でさえそう感じるがあった。私は一時的ではなく常に満たされていたいと望んでいた。でもそれは人に限界がある限り不可能なことだ。でもこの感情はとても深いところからきていた。ああ、自分のことなのに毎日新しい発見があるものだな、と私は改めて思った。賢者の住処に着くと、彼は私を待っていた。挨拶をし、私たちは話し始めた。

私は賢者にこう言った「3分間瞑想する間、本当にいろいろな疑問が頭にわいてくるのです。」

賢者「今日は、すべての人に必要な無条件の愛について話しましょう。」

私「無条件の愛って何ですか？」

賢者「無条件の愛とは、何の見返りも求められない、無料の愛です！」

私「昨今、無料のモノなんてあるのですか。」

賢者「もちろんです。先週、この世界を造った偉大な存在について話しましたね。彼のみが、あなたにそのような無条件の愛を与えることができるのです。そしてご存知ですか？無条件の愛こそが彼の一番の特質であり、その愛は一人ひとりに与えられているのです。」

私「本当に？この世界の一人ひとりに？」

賢者「先週言ったでしょう。老子は、それは無限であるといわれました。無限であるからこそ、無条件の愛を与えることができるのです。彼はすべての人々の名前をご存知です。一人一人の性格も。そして一人ひとりのありのままの姿を受け入れるのです。貧乏人や金持ち、見た目や学歴、聖別に関わらず、無条件で愛を与えるのです。彼の愛はその差異に関わらずすべての人類に与えられます。彼にとってあなたは唯一無二の存在なのです。」

私「なぜ彼はそのように愛されるのですか？」

賢者「自分の赤ん坊を愛するのに、その母親に理由はありますか？」

私「だってそれは彼女の子どもでしょう？愛するのは当然だと思います。」

賢者「偉大な存在は老子が言ったように、世界にとっての母親と一緒になのです。彼のあなたへの愛は自然なものです。赤ん坊は母親の愛を得るためにお金を払いますか？」

私「いいえ、何もしません。だって母親は自分の赤ん坊であるというだけで愛していますからね。」

賢者「彼にとってあなたはその赤ん坊と一緒にです。あなたは彼の愛を得るために何もお金を払う必要はないのです。彼の愛は無料なのです。ただあなたは彼の愛を受け入れればよいだけです。」

私「どうすれば彼の愛を受け入れることができるのですか。もしそれが本当なら、無条件の愛なしで生きることはおろかだし、

人はむやみに孤独に苦しむこともないでしょう。」

賢者「無条件の愛を受け入れる実践的なトレーニングをお教えしましょう。3分間の瞑想中、小さな子どもが母親に話しかけるように彼に話しかけ、必要なものをお願いしなさい。シンプルに自然に話しかけなさい。彼があなたに目をかけるように語りかけなさい。彼はあなたが愛されていると実感させる責任があります。私たち一人ひとりの心の中に、お金では満たされないものがあります。もっと深いものです。それは彼と交流することで満たされるのです。彼にこう語りかけなさい“この世のすべてを創造した神よ、私にはあなたの愛が必要です、あなたを感じさせてください”、と。“あなたはまるで私たちにとっての母親のようなもの、そしてあなたは私たち一人ひと

りに無条件の愛をくださるといいます。もしそれが本当なら、私にはその愛が必要なのです。あなたを側に感じたい。そして私を愛で満たしてください、と。」

私「やります。とても簡単なことなのに、その結果はきっと大きいものに違いありません。もしあなたが正しいなら、彼の愛を無視することはおろかなことです。ん？もしかして、その偉大な存在の名前をおっしゃいませませんでしたか？」

賢者「今日はここまでにしましょう。今日、私は彼の特質の一つについてお話ししました。また次回、彼について話しましょう。長い道のりになりますよ！そして彼について話すことに終わりはないのです！私が今回言ったことを忘れないでください。確実な結果を得られますよ。」

私「やります。続けることが楽しみになってきました！」

死後の世界の必要性

私は前回の続きを心待ちにして賢者を待っている間、このトレーニングによって新たに発見したことについて考えていた。自分の内面深くに入っていくと、自分の内部に食べ物や飲み物、仕事など物質的なものでは満たされない何かを感じた。人間とはなんと不思議なものか。賢者が現れ握手をすると、こう言った「ご機嫌はいかがかな。」

私「あなたがおっしゃるようにトレーニングをすることで、自分の中に物質的なものでは満たされない何かがあることに気が付きました。」

賢者「よろしい。それが、人間とほかの生物との違いなのです。老子は言いました“道のあり方と一体となっていればたとえ死

んでも滅びることはない”(老子「道德經大
三十三章」)。」

私「なんと深い言葉でしょう！」

賢者「人の命とはほかの生き物のように
体が滅びればそこで終わりというわけでは
ないのです。人の深部には体が死んだ後も
続いていくものがあるのです。毛虫が蛹と
なり、そして蝶となり羽ばたいていくよう
に、人の命も形を変えて体が死したのちも
魂は永遠に生きるのです。」

私「死後の世界があるなんて言う証拠は
どこにあるのですか。」

賢者「証拠をいう必要はないでしょう。
あなたは自らそれを知ることになるでしょ
うから。すべての人は深部に永遠に満たさ
れることのない何かを抱え、命が永遠に続
くことを望んでいます。歴史を見ればその

やり方は異なるにしても明らかです。ほかにも大事なことがあります。」

私「それは何ですか。」

賢者「以前言ったように偉大な存在はこの世界を創造した、世界にとって母親のようなものなのです。彼の一つの特徴が愛であることはもう話しましたが、もう一つの特徴は永遠の存在であるということです。老子は“道は永遠である”と言いました。母親が永遠の存在であるならば、その子どもも永遠の存在であるはずです。偉大な存在とその無条件の愛は永久に続くものであり、あなたが彼を受け入れるのであればあなたも永遠の命を幸福の中で生き続けるのです。」

私「あなたの言葉には驚嘆させられます。愛にあふれるこの偉大な存在をもっともっ

と知りたいと思いますが、あなたは彼の名前を決して教えてくれません。あなたが話す彼の特質をもっと知るにはどうすればいいのですか？あなたはどうやってこれらのことを知ったのですか？老子の本を読めばいいのですか？それとも何か他に本があるのですか？」

賢者「正直に言うと、老子は偉大な存在と愛について語りましたが、その名前については“誰も知らない”と言っています。老子が知らないその名前とその特質については“聖書”に書かれています。“聖書”には彼の無条件の愛、あなたへの思い、彼が永遠の存在であること、そして人生が終わった後に彼があなたを待つ場所について私が今まであなたに話したことすべてが書かれています。」

私「先生、聖書については聞いたことはありますが、書かれている内容に信ぴょう性がなさそうなので今まで読んだことはありません。」

賢者「読んだこともないものを疑うのも、知ろうともせずに拒否することも賢いこととは言えません。老子がその名を知らないと言った、この世界にとって母親のような偉大な存在について知りたいと思うのなら“聖書”を読むことをお勧めします。聖書を読むことによってあなたはあなた自身がどのような存在なのか、あなたがどれだけ特別な存在なのか、あなたの本当の価値を知ることとでしょう。そして、深い生命の秘密と死後の永遠の世界の素晴らしさを知ることになるでしょう。」

私「聖書を読みたくなくなってきました。でもきっと理解するのにあなたの助けが必要

になるでしょう。聖書を読むことにアドバイスはありますか？普通の本とは違いますよね？」

賢者「次回、どのように聖書を読めば良いのかお教えしましょう。今日の3分間の瞑想時に、偉大な存在に永遠と死後の世界について理解できるようあなたの心の目を開けてくださいとお願いしなさい。そしてこうお願いしなさい“愛あふれる永遠の存在よ、永遠とは何か、死後の世界はあるのか教えてください。人は、あなたは私たち人間にとっての母親のようなもので、あなたの愛は無条件にこの世界のすべての生あるものに向けられているといます。もし母親が永遠の存在であるならば、子どもも母親とともに永遠の存在であり、道とつながることで永遠のそんざいとなるのならば、

私は“永遠”にあなたとともにあります”。この続きは、次回に。」

私「先生、私のためにいろいろ教えてくださりありがとうございます。あなたに会うたびに私の心は開かれます。一人では不可能だったでしょう。本当にありがとうございます。」